| | |
|---|---|
| 氏　名（本籍） | 井戸川　清　行（いどがわ　きよ　ゆき） |
| 学位の種類 | 医　学　博　士 |
| 学位記番号 | 医　第　879　号 |
| 学位授与年月日 | 昭和49年2月20日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第2項該当 |
| 最終学歴 | 昭和26年9月30日<br>東北大学医学部医学科卒業 |
| 学位論文題目 | 転移性肺腫瘍の臨床的考察 |

（主　査）

論文審査委員　教授　星野文彦　教授　鈴木千賀志

教授　滝島　任

# 論　文　内　容　要　旨

悪性腫瘍の原発巣の治療に急速な進歩がみられる現在，悪性腫瘍の治癒率向上には，その転移を如何に制御するかにかかっている。転移は，種々な部位に発生するが，その発生頻度は剖検および臨床面から見て肺転移は高い。つまり悪性腫瘍の治療をするには常に肺転移の可能性を考慮しながら治療にあたることが必要である。悪性腫瘍の原発巣（肺癌を含めて）に対しての臨床的考察を加えた論文は無数に存在するが，いわゆる転移性肺腫瘍に関する研究は少ない。本研究は，かかる見地から転移性肺腫瘍（自験例）に臨床的考察を加え，悪性腫瘍の治癒率を高める意図の元に行なわれたのである。

## 研究資料と検査方法

研究の対象としたのは，昭和３６年４月１日から昭和４８年６月３０日までの１２年３ケ月間に東北大学医学部放射科に入院した悪性腫瘍１６６７例中肺転移と診断し得た１９７症例である。診断は主に臨床経過と胸部Ｘ線写真よりなされた。

## 研　究　成　績

1. 全悪性腫瘍患者の原発臓器，性別および発生年令。悪性腫瘍１６６７例中，最も多い原発巣は乳癌４９６例（２９.７５％），以下悪性リンパ腫１５０例（９.００％），食道癌１２８例（7.68％），甲状腺癌１２６例（７.５６％），上顎癌７０例（４.２０％），肺癌６７例（４.０２％），子宮癌６３例（３.７８％），胃癌５７例（３.４２％），舌癌５５例（３.３０％），直腸癌５３例（３.１８％）…… である。男女比は１：1.３８で女性が多く。発症年令は男性は５０才代，６０才代，４０才代，女性は４０才代，５０才代，３０才代の順に多い。　2. 肺転移症例の原発臓器。全悪性腫瘍患者１６６７例中１９７例に肺転移を認めた。肺転移率は１１.８２％である。原発臓器別には，腎癌（５０.００％），軟部組織肉腫（４６.１５％），縦隔腫瘍（２８.５７％），骨肉腫（２６.６７％），悪性リンパ腫（２１.００％）が高く，皮膚癌，脳腫瘍は１例も肺転移を認めなかった。概して頭頸部腫瘍（上咽頭癌を除く）の肺転移率は低かった。　3. 肺転移発見時の胸部Ｘ線像。胸部Ｘ線写真の所見より肺転移巣を，大結節型（主径１０㎜以上），小結節型（主径１０㎜以下），リンパ管炎型，肺炎型，肋膜転移型，無気肺型，リンパ節腫瘍型に分類し，リンパ節腫脹型の多い悪性リンパ腫を除いた１５８例を考察すると，大結節型５２例，肋膜炎型３４例，小結節型３２例，肺炎型２５例の順に多かった。悪性リンパ腫は３８例中２８例にリンパ節腫脹を認めた。　4. 肺転移の発見時期。原発巣治療から肺転移発見までの平均期間は原発臓器別では，

甲状腺癌（４３.７月），乳癌（２９.５月）が長く，肺癌（２.９月）が短かかった。 5. 胸部Ｘ線写真からの治療効果。胸部Ｘ線像の転移巣の縮少度からの判定では，放射線治療が化学療法，内分分泌療法（乳癌に対して）より効果的と考えられた。 6. 肺転移治療後の生存率。治療は放射線治療，化学療法，内分泌療法（単独あるいは併用）で行なわれ，外科的療法が行われた症例はない。原発巣が甲状腺の症例を除く生存率は３月７１.９％，６月４１.１％，１年２２.８％，２年１６.７％，３年8.４％，５年7.７％であり，甲状腺癌は予後がよかった。なお対症療法のみの生存率は極めて低かった。 7. 肺転移発見時の症状の有無と生存率。肺転移発見時に肺転移に由来すると思われる症状の有無により症例を２群に分け検討すると，症状の無い群の生存率は有る群より高く，定期検診の必要性を痛感せしめた。甲状腺癌を除いた生存率（治療症例）は，有る症例で６月１７.１％，１年3.１％，３年０％，無い症例で６月６１.２％，１年３３.３０％，３年１６.３％を示した。 8. 乳癌（術後）肺転移の生存率。治療法により異なり単独でも，あるいは化学療法，内分泌療法との併用でも放射線治療を施行した症例が，放射線治療を用いなかった症例より生存率は高かった。前者で５年生存は３例あるが，後者で２年以上の生存者は認めなかった。 9. 悪性リンパ腫の生存率。治療法により放射線治療単独，放射線治療と化学療法との併用，化学療法単独の順に生存率が高かった。 10. 胸部Ｘ線像（治療開始時）と予後。甲状腺癌，肺癌，縦隔腫瘍を含まぬ１０７例で検討した。リンパ管炎型，リンパ節腫脹型は全例死亡し，平均生存期も3.６月，4.３月と短く，混合型は２７例中２５例死亡（平均生存期間3.２月と最短）し，肋膜炎型は１９例中１７例死亡（4.４月），肺炎型は９例中８例死亡（4.８月）した。結節型の予後は比較的良く，３８例中１０例の生存者があり，５年生存例は全て結節型だった。 11. 原発巣治療開始時より肺転移発見までの期間と予後。６ケ月以内に転移を生じたのは１７２例中８０例で，生存５例，死亡７０例（死亡率９３.８％），６ケ月～１年の間に転移を生じたのは２３例あり，生存４例，死亡１９例（死亡率８２.６％），１年以上経過して肺転移を生じた７１例では生存１０例，死亡６１例（死亡率８５.９％）だった。２年以上生存した症例は１７１例全例中２４例あるが期間は６月末満６例，６月～１年で４例，１年以降１４例だった。

以上の研究成績より，転移性肺腫瘍の予後は不良であるが，現時点でその治療成績を向上させるには定期検診で症状の発生以前に発見することにつきるとの結論に達した。

# 審査結果の要旨

著者は昭和３６年４月１日から昭和４８年６月３０日までの１２年間に東北大学医学部放射線科に入院した悪性腫瘍１６６７例中主として臨床経過と胸部Ｘ線写真より肺転移と診断した１９７例について臨床的考察を試みた。

１６６７例の悪性腫瘍患者の原発臓器は乳癌約３０％で最も多く以下悪性リンパ腫，食道癌，甲状腺癌，上顎癌，肺癌，子宮癌，胃癌，舌癌，直腸癌の順であった。その肺転移率は１1.8２%であり原発臓器別には腎癌５０％，軟部組織肉腫４６％，縦隔腫瘍２８％，骨肉腫２７％，悪性リンパ腫２１％が転移率が高く，皮膚癌，脳腫瘍は１例も肺転移を認めず，上咽頭癌を除くと一般に頭頸部腫瘍の肺転移率は低い。

肺転移発見時の胸部Ｘ線像を大結節型（主径１０㎜以上），小結節型（１０㎜以下）リンパ管炎型，肺炎型，胸膜転移型，無気肺型，リンパ節腫瘍型に分類すると悪性リンパ腫は３８例中２８例にリンパ節腫脹を認めた。それ以外の１５８例では大結節型が５２例で最も多く，次いで肋膜炎型，小結節型，肺炎型の順であった。この分類から甲状腺癌，肺癌を除いた１０７例の予後をみると，リンパ管型，リンパ節腫脹型は全例死亡し平均生存期も3.6月，4.3月と最も短く肋膜炎型は１９例中１７例死亡（4.4月），肺炎型は９例中８例死亡（4.8月）したが，之に反し，結節型は予後が比較的よく３８例中１０例の生存者があった。

肺転移の治療法別に検討すると放射線治療単独でも，化学療法，内分泌療法との併用でも放射線治療を施行した症例が放射線治療をやらなかった症例より生存率は高く前者では５年生存３例を認めたが，後者では２年以上の生存者はなかった。

肺転移発見時症状の有無により検討すると甲状腺癌を除いた生存率は有症状群では１年3.1％，３年０％であるのに無症状群は１年３３％，３年１6.3％で無症状群が高く定期検診の必要性を考えさせた。

著者は以上の研究成績から転移性肺腫瘍の予后は不良ではあるが，現時点でその治療成績を向上せしむるには胸部撮影による定期検診を行い，積極的に特に結節型に対し放射線治療を含む治療を実施すべきであるとの結論を得た。この知見は充分学位に値するものと考える。